9. 諏訪湖にまつわる話し

● 諏訪大社と御神渡(おみわた)り

諏訪盆地に零下以下の低温の日が続くと諏訪湖が結氷し、やがて全面結氷となります。全面結氷が24 時間以上続いた日を全面結氷日と言います。諏訪湖が全面結氷すると、湖氷に放射冷却が進むため、地元で「からしみ」と呼ばれる低湿低温の気候が強まり、最低気温も松本を下回ることが多くなります。さらに零下 10° C近くまで冷え込む日が2、3日続き、氷厚が10cm くらいになると、日中と夜間の温度差により氷は収縮と膨張とによって生じた亀裂部が鞍状に隆起して、御神渡りが発現します。

御神渡りとは、諏訪大社の上社から下社へ神様が渡った跡との言い伝えから付けられた名前で、あたかも大事変でも起きたかのような大音響とともに氷が重なりあうように盛り上がります。

諏訪湖だけに起こる氷の現象ではありませんが、規模や歴史的意味から、諏訪湖が最も注目されています。この原因としては、諏訪湖上の気温の変化、季節風、諏訪湖の深度や面積、あるいは標高などが挙げられ、御神渡りの方向なども古くから調査・研究されてはいのですが、その実態はなかなか明瞭とはいかないようです。

最近では諏訪湖が全面結氷したあとの冷込みが足らないためか、御神渡り現象も少なくなっています。(A)

※文末のアルファベットは、参考資料を指します。これらの目録は章末に列記してあります。

※御神渡りは本来は御渡りが正しいのですが、慣例に従いまして、本書では御神渡りと表記しております。

<u>諏訪明神と龍神伝説</u>

日本国内には長崎、浅草をはじめ各地に龍神の舞が伝えられています。諏訪市では、神代より諏訪明神は龍の化身であるとして拾数体の龍頭などがつくられました。現在も諏訪地域のイベントでその舞、太鼓を見ることができます。また、諏訪大明神画詞(すわだいみょうじんえことば)の中に「元寇の役即ち文永十一年(1274年)弘安四年(1281年)再度にわたる蒙古軍の襲来に際し、上社の神苑に巨竜立ち昇り西方に向かって飛翔し博多湾上に蒙古の軍船を撃滅し給う」という記述があります。

諏訪明神と龍との関係について、宮坂宮司(八剱神社)は、「諏訪の神は、水と風の守護神とされています。神体山である守屋山に雲がかかると雨が降るといわれておりまして、山に静まる神が水の徳をたたえるとされています。そのようなことから、諏訪の神は水に関わりの深い龍神であるといわれており、蛇体となった甲賀三郎伝説にも表れています。また、御渡りや湖の氾濫などの自然現象も、湖にひそむ水の精霊(＝龍)の存在を想像させるのではないでしょうか。『天竜川』の名も、それを連想させます。ところで、諏訪で行われている龍神の舞は新しいものですね。直接神事とは結びつきません。もとは、長崎の諏訪神社で奉納している蛇踊りです。長崎の諏訪神社は、江戸時代鎖国の際に外国から国を護るため、威力ある神である諏訪の神を祭ったことが始まりとされています。その後、長崎での中国風の行事と、諏訪大社の神体のイメージが重なって発展し、逆輸入されたのではないでしょうか。」と話されました。

諏訪湖の氷結と御神渡り　（宮坂宮司から提供いただきました資料により作成した表です。）

年次	全面結氷	御神渡り発生日	御神渡り拝観日	備考
明治 5			1/21	
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
13			明けの海	
14				
15				
16				
17				
18				
19				
20				
21				
22				
23			明けの海	
24				
25				
26			1/26	御渡り拝観再興協議
27			1/30	
28			1/28	
29			2/14	
30			1/27	
31			1/19	
32			1/28	
33	1/9		2/8	氷厚1尺5寸（45cm）
34	1/18		1/30	氷厚1尺（30cm）
35			1/26	氷厚1尺2寸（36cm）
36	1/14		2/16	
37			1/9	
38			1/12	
39			1/29	
40	明治39年 12/28		1/27	昭和39年に結氷
41			1/18	
42	明治41年 12月下旬		1/24	氷厚1尺2寸（36cm） 名古屋第3師団氷上騎馬演習
43	2月上旬		2/15	2月上旬に2回結氷
44	1月上旬		1/23	
45	1月上旬		2/8	1月下旬に再結氷
大正 2	1/1		1/30	氷厚1尺（30cm）
3	1/8		明けの海	
4	1/10		1/24	豊橋連隊氷上軍事試験
5			明けの海	
6	1月上旬		2/23	所沢陸軍航空隊氷上飛行試験
7	大正6年 12/23		1/31	氷厚1尺（30cm）
8	1/6		2/9	
9	1/21		2/27	1月26日に再結氷
10	1/8		2/5	
11	1/5		1/27	氷厚1尺（30cm）
12	大正11年 12/20		1/24	
13	1/24	1/30	2/7	御神渡り午前10時に発生
14	1/15	1/17	1/29	御神渡り午前　8時に発生
15	1/3	1/7	1/23	御神渡り午前　2時に発生
昭和 2	昭和元年 12/26	12/28	1/9	
	1/23		1/27	2回目の拝観（確認できず）
3	1/4	1/8	1/19	御神渡り午前　8時に発生
4	昭和3年 12/31	1/5	1/11	御神渡り午前　8時に発生
5	1/9	1/11	1/31	御神渡り午前中に発生
6	1/11	1/18	1/23	御神渡り午前　5時に発生
7			明けの海	
8	1/14	1/16	1/27	
9	1/6	1/16	1/19	
10	2/7	2/9	2/12	
11	昭和10年 12/21	12/31	2/2	
12			明けの海	
13	1/4	1/9	1/21	御神渡り午前　8時に発生
14	1/4	1/8	1/18	御神渡り午前　8時に発生
15	1/17	1/22	1/30	
16	2/2	2/5	2/12	
17	1/20	1/23	1/30	
18	1/6	1/8	1/21	
19	1/9	1/19	1/24	
20	1/2	1/5	1/21	

年次	全面結氷	御神渡り発生日	御神渡り拝観日	備考
昭和 21	昭和20年 12/15	1/3	1/10	
22	1/4	1/8	1/26	御神渡り午前　8時に発生
23	昭和22年 12/20	12/24	1/21	
24			明けの海	
25	1/11	1/13	1/28	
26	昭和25年 12/25	1/7	1/21	
27	1/13	1/31	2/3	
28	昭和27年 12/27		明けの海	
29	1/27	2/2	2/8	
30	1/3	1/8	1/28	
31	1/26	1/28	2/13	
32	昭和31年 12/23	12/25	2/20不明	2月14日に再結氷
33			明けの海	
34	1/15	1/20	1/25	
35	1/24		明けの海	
36	1/6	1/9	1/20	
37	1/25		明けの海	
38	1/13	1/25	2/2	
39			明けの海	
40	1/15	1/18	1/24	
41	1/20	1/22	1/25	
42	昭和41年 12/28	1/17	1/22	
43	昭和42年 12/28	2/13	2/15	
44			明けの海	
45	昭和44年 12/21	1/7	1/22	
46			明けの海	
47			明けの海	
48			明けの海	
49	昭和48年 12/25	12/29	1/9	
50	1/14	2/11	2/15	氷厚20cm
51	1/13	1/28	2/1	
52	昭和51年 12/28	1/8	1/16	
53	1/23	1/31	2/6	
54			明けの海	
55	1/19	1/26	1/30	
56	昭和55年 12/30	1/5	1/24	
57	1/30	2/7	2/14	氷厚15cm
58	1/23	1/27	2/5	陸上より拝観
59	1/6	1/12	1/29	氷厚25cm
60	1/5	1/7	2/3	氷厚25cm
61	1/7	1/9	2/2	
62			明けの海	
63			明けの海	
64			明けの海	
平成 2			明けの海	
3	1/19	1/23	2/3	
4			明けの海	
5			明けの海	
6			明けの海	
7			明けの海	
8	1/12		明けの海	
9	1/23		明けの海	
10	1/11	1/25	1/31	
11	1/12		明けの海	
12			明けの海	
13	1/16		明けの海	氷厚30cm
14			明けの海	
15	1/6	1/17	1/19	昭和53年、平成10年に似る

諏訪の民話

御神渡り（おみわた）

むかしむかしの諏訪の地は、いちめんの薮原に毒へびやけものがのさばって、とてもとても人の住めるようなところではありませんでした。そんな荒れ地をゆたかな美しい国にしたのが、諏訪のお明神さま、諏訪大社のタケミナカタノミコトでした。

諏訪のお明神さまは、それはそれは立派なごようすをしておられました。背は見上げるように高く、お顔は澄みきって、そのおおしく美しいお姿にはだれもが見惚れたということです。

さて、お明神さまには、ヤサカトメノミコトというおきさきがいました。この女神さまもほんとうに息をのむほど美しいかたでした。そよ風のようなお声、野いちごのような唇、肌は雪のように白く、長い黒髪にいつも野の花をさしておられました。

このおふたりの神さまが、力をあわせて荒れた諏訪の地を切りひらかれたのです。そればかりでなく、おふたりは村の人たちに田や畑のしごとや馬を飼うこと、湖に出て漁をすること、そしてお蚕さんのマユから糸をつむぐことなどを教えました。 おふたりの神さまは、こうして村の人たちといっしょに、とても幸せに暮らしておりました。

でも、ある年のことです。おふたりはささいなことで大げんかをしてしまいました。そして、おきさきが湖の向こうの下諏訪にひとりで引っ越してしまわれたのです。

さて、お明神さまはひとりになったさびしさにたえられず、毎日のように下諏訪におきさきをたずねるようになりました。でもタケミナカタは神さまなので、自分のさびしがりやを村の人たちに知られたくありませんでした。「見つかったら笑われてしまう」と、暗くなってから湖に舟を出し、夜明け前にこっそりと帰ってくるのでした。

そんなある夜のこと、いつものように夜の明ける前に帰ろうと岸に出ると、湖に氷が張りつめて舟が出せなくなっているのです。 さてこまった。もうすぐ夜明けです。「こうなったら走っていこう！」お明神さまは氷の上を、だ、だあんと走り出しました。

その足音はまるで地鳴りのようにひびきわたり、氷はバリバリと音をたててひび割れました。お明神さまの走り去ったあとには、さけた氷がまるで山脈のようにもりあがりました。夜が明けて、村人たちは氷の山脈に気づきました。

「ははあん！」お明神さまが女神さまのところにおわたりになったのは一目瞭然。なぜならば、氷の山脈は、お明神さまのお住まいの諏訪の神宮寺から、おきさきのヤサカトメノミコトがいらっしゃる下諏訪まで、ずうんときれいにつづいているのですから。 でも、おふたりのいさかいをこころから心配していた村の人たちは、タケミナカタを笑うどころか、とても喜び、感激しました。

「見ろや、お明神さまがおきさきさまにあいにいらっしゃったで。おらとこの神さまはおきさき思いのほんとにやさしい神さまだ」

お明神さまはずっと下諏訪にかよいつづけ、毎年のように立派な氷の山脈ができました。村の人たちは、この氷の山脈を『御神渡り』と呼んでおがみました。

「あの大きなお明神さまがおわたりになったのだから、おらあたちが氷にのってもだいじょうぶずら」

御神渡りがすむと、村人たちはこぞって氷の上に出ました。氷を割って魚も取りました。御神渡りのできかたで農作物のできぐあいをうらなうようにもなりました。

もちろんいまでも湖がいちめんにこおると、お明神さまの『御神渡り』が見られます。

● 諏訪湖の水平虹

虹とは太陽を背にして立つ時、前方に水滴があると、太陽光線がその水滴に差し込み、内面で反射して出てくる現象を言います。普通の虹の水滴はほとんどが空中の雨滴や霧滴で、空間に分布しているのに対し、水平虹は、水面に浮く水滴や、草原に生じた水滴に屈折する光によって起こる現象で、水平面に起こるものを言います。

昭和37年3月4日撮影

水平虹は諏訪湖だけに起こる現象ではなく、一般の水田や池でも起こる現象ですが、頻度あるいは規模の大きさから、諏訪湖の水平虹は早くから学者に注目されていました。
昭和33年10月から36年12月にかけて70回もの観察が記録されています。

諏訪湖の水平虹は、無風の快晴の日、朝方気温が激しく降下し、水面で水蒸気が結露する状況下に多く見ることができます。このような気候条件は、西方からの移動性高気圧が日本列島をおおう時によく現われ、春と秋に頻度が高いそうです。（Ａ）

※文末のアルファベットは、参考資料を指します。これらの目録は章末に列記してあります。

● 「阿呆丸」の話し（浜中島の撤去）

文政13年(1830)有賀村に住む伊藤五六郎は有賀村ほか13ヶ村の名主の連署をもって、天竜川の湾曲を無くしてほしいこと、釜口から築(やな)までの川幅を広げてほしいこと、橋はもとの位置にしてほしいこと、下浜の付近で百間(約182m)程堀を広めてほしいことなどを嘆願しました。藩庁もこれに応じて、さまざまに調査をした結果、浜中島を撤去することに見解がまとまり、これに先駆けて島に居住している4世帯の移転が行われました。下浜村橋爪の地に、それぞれ藩から4畝22歩の屋敷を与えられ1石に近い免租を得ての移転でした。

この時、五六郎は浜中島撤去に要する人員を1万5911人と見積もり、工事の進め方、日当り、日程など詳細に記した工事の請書を出しました。この内容によると、土を無駄に切り流して下流の川底を高くするようなことはせず、他に新しい土地を得ようという意図が読み取れます。当年22、3歳という若さにもかかわらず、五六郎は藩よりこの大工事を請け負わされました。彼はこの工事のために、在来の湖舟の20倍余もの大船を使いました。人々はこの大船を「阿呆丸」と呼んで、あざ笑ったとのこと。人足には、貧民や乞食などをあてました。大船を島に横付けし、土を積み、湖を横切って湖南、有賀村に運びました。その結果島は消え、六町歩もの新田ができました。この新田が現在の中曽根の1部に当たり「五六郎田圃」「五六郎分」などと呼ばれています。こうして、工事は予定通り、天保元年に完了し、五六郎は多くの人々の尊敬を集めました。当時、漁舟以上の大きい船は禁制だったので、「阿呆丸」は作業終了後、すぐに取り壊されたということです。（Ａ）

■ 「御神渡り」「水平虹」「阿呆丸」（浜中島の撤去）の参考文献

Ａ：諏訪湖「治水の歴史」 平成10年3月：長野県諏訪建設事務所刊
内容：諏訪湖の治水・浄化及び湖岸環境事業の記録とともに諏訪湖の概要、歴史上の説話を紹介
保管場所：長野県諏訪建設事務所建設課、諏訪地域の各市町村図書館、小中学校

● 武田信玄の石棺

武田信玄は、上洛の折りに病に倒れ、天正元年（1573）4月12日に信州の駒場城（下伊那郡根羽村）で息を引き取ります。死にあたって、「三年間は余の死を隠し、その後の、余の遺骨は具足を付けて諏訪の湖に沈めよ。」と遺言します。この石棺が沈められる情景を諏訪の伝承を集めた「諏訪のでんせつ」（竹村良信著　長野県信濃教育会刊）では、

ー　ときは、天正4年(1576 年)4月 12 日のま夜中です。

その夜は、諏訪湖のうえの空に、どすぐろい雲がおおっていました。さっきまで雲のきれまから、ちょっとかおをのぞかせていた三日月も、西の山にかくれました。星もひとつも、またたいてはいません。（中略）。・・・・・・・

まっ赤な石の棺が、さむらいの手からはなれ、ズブン、ズブ、ズブ、ズブ・・・にぶい音をだしながら、たいまつの光でまっ赤にかがやく湖の底へきえていきました。

石の棺が湖の底へとどいたのか、かぞえきれない赤いあわが、つぎつぎと浮かんではきえました。しばらくして、ひとつ大きい、血のようなあわがぽかんと浮いて、ぷつんときえました。それだけです。

たいまつの火が消されました。あたりは、ふたたび、しんのやみと、しんのしずけさにもどりました。

と紹介されています。

■　信玄の水中墓

［はじめに］

諏訪湖底に横たわる巨大な菱形の実体を確認するため、信大理学部諏訪臨湖実験所（現信大山地水環境教育研究センター）続いて読売新聞社・日本テレビ放送網、両者合わせて7回の探査をしてから十年余りたつ。探査は諸船の状況から、武田信玄の水中墓城では、との期待を込めてのことだった。

だが最終的には、菱形の輪郭はくぼ地のへりと判明、一度は電磁波探知機がくぼ地でとらえた墓石様にも見えた「物体」の映像も二度と画面に現れることはなかった。自然のくぼ地としては整い過ぎる菱形は、ナゾのまま今も湖底に沈んでいるはずだ。

［発端］

話は1987年にさかのぼる。国土地理院の委託により、ソナー（超音波探知機）で諏訪湖底の微地形調査をしていた民間会社の技師が実験所で、湖底の地形記録紙の一部を広げ、「これは何でしょうね。人工的な構造物のようですが」と一点を指差した。そこには、一辺25㍍の菱形がくっきりと浮かび出ている。

沖野外輝夫所長（当時）にも分からない。実験所のスタッフは興味津々で、さまざまな珍説が出た。その中に信玄の墓説もあった。武田菱にそっくりだし、信玄の水葬伝説もあるからだが、当初は面白がっての茶飲み話でしかなかった。

ところが、軍書『甲陽軍艦』に、信玄が伝説と同じ遺言をしたという記述があることを知った。また、地図上で下諏訪町高浜沖数百㍍の水域に点で示されていた菱形は、諏訪大社の上社～下社を結ぶ線と小坂観音院、東照寺（その後廃寺）を結んだ線の交点に重なることも分かった。四ヶ所とも信玄と無縁ではないと聞き、線を引いてみたのだ。「ひょっとしたら」。冗談話がにわかに現実味を帯びてきた。

諏訪市の医師立木正純さんが潜水調査を提言したのを契機に、実験所は湖底堆積物という出水水質調査をかねて菱形調査を決定する。これが読売新聞に報告されると、しばらくは連日、「湖底のロマン」について実験所に、全国から電話が引きもきらなかったという。

［臨湖実験所探査］

第1次探査（88年11月26，27日）

潜水作業は立木さんのつてで潜水会社が協力し、潜水士が水域湖底を棒で突き刺し回る方法を採用。しかし、正確な位置が特定出来ないうえ、水深4m、ひざまで埋まるヘドロと視界4，50cmでの作業は困難をきわめ、2日とも何の手がかりも得られなかった。

両日は新聞、テレビ、週刊誌など百人近い報道関係者が詰めかけ、上空には何機ものヘリが舞うなど、諏訪湖周辺は大変な騒ぎだった。

第2次探査（88年12月20日）

初日は、菱形の映像をとらえたソナーを使い、同じ技師が同じ方法で水域をくまなく探ったが、ついに菱形は現れなかった。技師は首をひねるだけで、理由は分らない。このため、翌日に予定していた潜水作業は中止し、実験所は探査を打ち切った。

［読売新聞・日テレ合同探査］

協同探査は実験所の全面的な協力を得て、89年12月から翌年11月まで5回、延べ30日を超える。

第1次探査（89年12月4日―7日）

日本水中考古学会の茂在寅男副会長をチーフに、最新鋭の電磁波探知機（水中・水底下レーダー）を投入。この水域で20数m㍍×20㍍ほどのくぼ地を発見し、中央部近くには差し渡し3，4㍍の穴があり、その穴のヘドロ中から、二，三段重ねにも見える幅7．80㌢の縦長の物体がのぞいているのをモニター画面がキャッチした。

物体の真上から棒で突くと、「コトン」「コトン」との音が聞こえるのだが、最終日の時間切れで、くぼ地の形状、物体の確認にいたらないまま探査は切り上げとなった。

第2次探査（90年3月19日―23日）

今回は潜水して、前回探査で電磁波探知機がとらえた物体の形状、材質を調べるのが目的だった。潜水士、ダイバー計8人が潜水し、パイプで突いたり、目標点周辺のヘドロをポンプで吹き飛ばしたりして探ったものの、目標物体は発見できなかった。前回に測量した数値が目標からずれていたらしい。

ただ、この潜水作業で、桔梗の紋のあるおわん一個、長さ25㌢、太さ15㌢ほどで、文字らしきものが書かれた、折れた石が採取されている。

第3次探査（90年6月7日―12日）　略

第4次探査（90年10月9日―16日）

今回から沖野所長が調査団長。新鋭機器で位置測定をしながら、目標物体水域を一辺12㍍のイカダ上から密度濃く探索棒で探索を続けたが、収穫は得られていない。

第5次探索（90年11月21日―30日）

再度、電磁波探索機で目標水域100㍍×100㍍を中心に300㍍四方を探査し、重要ポイントではイカダからの棒探索、ダイバーによる掘削もした。

その結果、①南北20数㍍、東西17－20㍍の菱形くぼ地を確認②菱形の頂点は東西南北を指す③菱形内の中央部の穴で、前年12月にキャッチした物体は存在しない（前回までに見つかった、ドラム缶だったのではとの説が有力）― ことなどが分かった。

技術を担当した会社は「ナゾの菱形内部にある物体の究明は、なおも信玄の墓が湖底のどこかに存在する可能性を残し、終了した。今後、その菱形がなぜできたのか、菱形内部に『信玄の墓』に結びつくなにかがあるかは、専門の方々にゆだねる事とする」と主催者側への報告書を結んでいる。

おしまいに

沖野元所長（信州大学理学部名誉教授）は「あんな菱形が自然にできたとは考えにくい」と言い、今でも人工的に造られた可能性を捨てきれないと考えているそうだ。

一方、結末がどうであれ、探査が住民の諏訪湖への関心を呼び「副産物として」浄化意識が高まった、と受けとめた人たちも多かったと聞いている。

（塩川　芳朗氏記：長野大学非常勤講師、元読売新聞記者）

■　武田信玄の特集記事

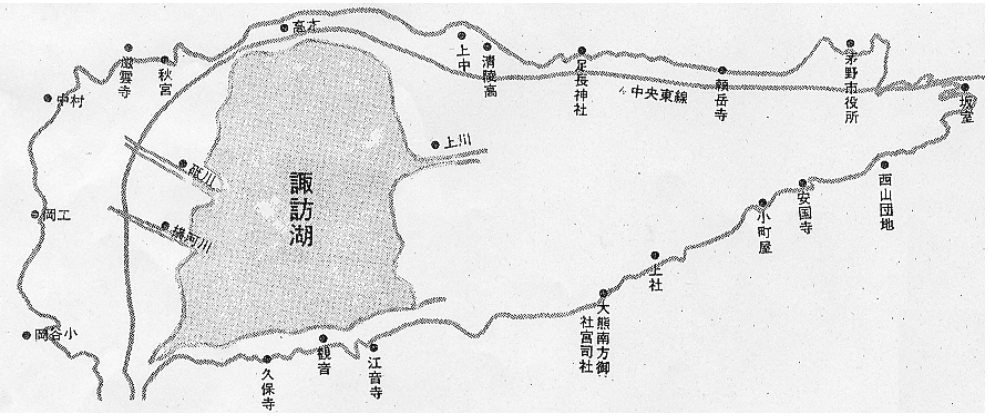
平成元年 NHK 大河ドラマ「武田信玄」が放送となりブームとなりますが、それに先駆け昭和62年から昭和63年にかけ市民新聞で、「武田信玄」の20回の特集記事が以下の表に示しますように組まれています。

合本「増刊号・信玄」　市民新聞グループ		
発行年月日		記　事
昭和62年	10月25日	①「承知」の承知橋
	11月1日	②死闘　瀬沢合戦
	11月8日	③再度の諏訪侵攻
	11月15日	④無念の切腹
	11月22日	⑤軍用道路　棒道
	11月24日	⑥棒道　あちこち
	11月29日	⑦伊那谷の死闘
	12月6日	⑧決戦　塩尻峠
	12月15日	⑨諏訪法性の鬼
	12月20日	⑩軍用金産む金山
	12月27日	⑪諏訪の姫　悲哀
昭和63年	1月4日	⑫明神へ深い信仰
	1月10日	⑬負傷者に隠し湯
	1月17日	⑭キラリ武田菱
	1月24日	⑮信玄のあの遺言
	1月31日	⑯興亡　高遠城
	2月7日	⑰諏訪の地下人
	2月14日	⑱勝瀬　自害
	2月21日	⑲“侵略者”信玄
	2月28日	⑳諏訪明神旗に

● 変化した諏訪湖の湖面

諏訪湖の面積が最大となった時には、標高800m近くまで広がっていたことは、地質的に上諏訪中学校庭下の泥炭層、河湖成段丘の存在などにより確認されています。この標高で湖畔線を推定しますと、岡谷の湊側は中央道下になり、諏訪大社の上社、茅野市の西山団地、坂室、茅野市役所、そして諏訪市の清陵高校上、上諏訪中学校付近、温泉寺を経て、下諏訪町の諏訪大社下社の秋宮付近、岡谷市の長地中村、山の手、川岸へと結ぶことになります。その後、湖面は河川からの土砂流入と天竜川の釜口の河床低下による湖水位の低下により縮小されていったといわれています。さらに、江戸時代の浜中島、弁天島の撤去などの湖尻の切り開きや埋立て、干潟の出現により小さくなっていきました。明治18年の測量では、湖の面積は約 14.5km^2 とされています。その後の埋立て、干潟の出現、湖底の浚渫土による埋立てにより、現在の湖面積は約 13.3km^{2}となっています。（Ａ）

また、宮坂宮司（八剱神社）は、「八剱神社には、江戸時代の諏訪湖を写した絵図があります。これらをずいぶん諏訪湖の大きさが違っていたことがわかります。また、鎌倉街道を結ぶ線が、この標高800mと一致しますし、諏訪大社をはじめ、手長、足長神社等の主だった神社もこの街道沿いにあります。その後、甲州街道、国道20号と主だった道の位置が変わっていったのは、湖面の変化と無関係ではないでしょう。」と指摘されました。

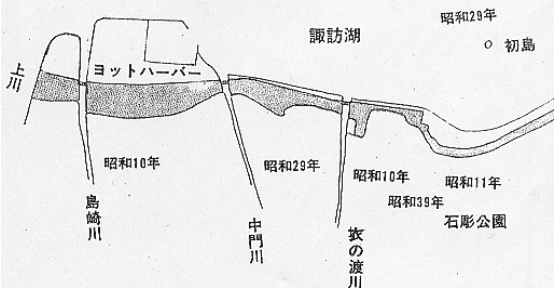


大きかった諏訪湖（市民新聞：長期連載記事諏訪湖　第８部湖面動く①　S56.9.17.）より

※文末のアルファベットは、参考資料を指します。これらの目録は章末に列記してあります。

■ 高島城あたり

高島城は、豊臣秀吉の武将、日根野織部正高吉により築城され、完成した城の石垣に波が砕ける浮城（または、水城）であったといいます。浮島城として有名であった高島城は、葛飾北斎の「冨岳三十六景信州諏訪湖」渓斎英泉の「木曾街道塩尻嶺諏訪湖水眺望」の浮世絵に描かれています。戦国時代当時は、城跡は湖中の島で、この島に通じる道があり縄手とよばれていました。現在、この道は、並木通りとして残っています。



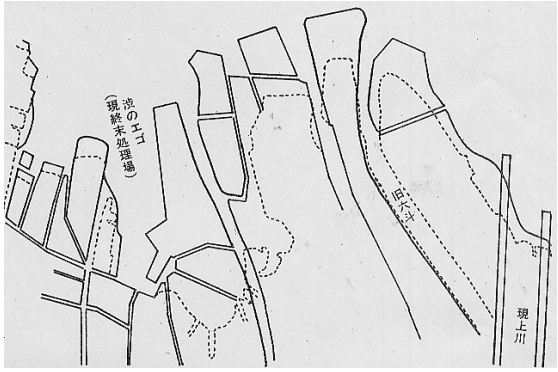
ヨットハーバー～諏訪市湖畔公園付近の埋立て
（市民新聞：長期連載記事諏訪湖　湖面動く②　S56.9.19.）

明治39年の上諏訪　手長丘より望む　左上に高島城趾
（三村文明堂所有：諏訪市博物館複写版より転写）

江戸時代末、明治当初には、高島城の湖側は、広く水田に変貌することになりました。その後、昭和１０年に島崎川～中門川間が 50,721 ㎡、衣ノ渡川～ら湖畔公園のＤ５１がある所まで 13,860m^{2}埋め立てられました。

翌１１年には、現在の石彫公園付近、6,600 ㎡が埋め立てられました。さらに、昭和２９年には、中門川から衣ノ渡川間の出先に 22,099m²が埋め立てられ、上川の河口堆積した土砂で面積 660m²の初島をつくりました。また、昭和３９年には、諏訪市湖畔公園のＤ５１のある付近、3,300m²が埋め立てられました。その後、昭和５１年から昭和５３年にかけて行われた浚渫工事にともなう埋立てや諏訪市湖畔公園周辺整備によりヨットハーバーや湖畔公園にかけての現在の湖岸ができあがりました。（Ａ）

■ 渋崎・豊田あたり

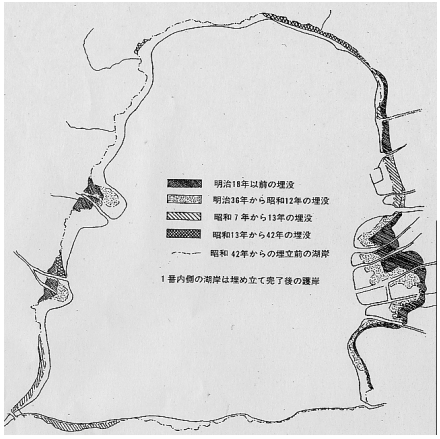


点線は、明治35年の湖岸　実線は、昭和12年の湖岸

渋崎～豊田のかつての湖岸の変化
（市民新聞：長期連載記事諏訪湖　第8部湖面動く②　S56.9.19.）

新しい土地ができ、地区の変化が大きかった所に渋崎があります。渋崎から豊田にかけては遠浅でしたので、少しの水位低下でも広い土地ができたといわれています。新しい土地を得るために、湖の砂をあげて舟で運び水田に入れ嵩上げをし、湿地を水田にする努力が行われました。また、昭和9年から上川（旧六斗川）の河筋が図のように真っすぐ諏訪湖に流入するようにつけかえられ、河幅も2倍となり様相は大きく変わりました。つけかえられた上川は、その後の台風などで大量の土砂が流入し一帯に広い洲を作り、現在のヨットハーバーや湖畔公園のもととなりました。

江戸時代中期までには、豊田小学校前の市道 23,255 号（旧県道諏訪辰野線）あたりまでが湿地帯として陸地化したようです。その後、豊田の曾根崎に伊藤五六郎が釜口の浜中島を撤去した土砂を運んで埋立て 6ha の水田をつくり出しました。これが人工的な埋立てを行った大事業の第1号で、今も地元の人々に尊敬され親しまれています。しかし、このように諏訪湖の水位の変動によって広い土地ができた地区だけに少しの水位上昇でも冠水する水田が多く、米づくりは苦労が多かったようです。このため、江戸時代から地区の人々は、釜口、天竜川の草刈りや木の枝切りを行い、諏訪湖からの排水をよくすることにつとめるなど水との闘いを続けていました。昭和11年に釜口水門が完成し、操作が開始され湖水位が調整されるようになると、水害の回数は減り水田は安定した実りをあげるようになりました。現在の湖岸線はほとんど、昭和44年度から始まった浚渫事業によって昭和53年までに埋め立てられたものです。また、渋のエゴは流域下水道処理場（クリーンレイク諏訪）の用地として埋め立てられました。（Ａ）、（Ｂ）



諏訪湖の埋立ての変遷
（市民新聞：長期連載記事諏訪湖　第8部湖面動く②　S56.9.19.）

諏訪湖の面積の変化（市民新聞：昭和56年9月19日の「特集諏訪湖第8部湖面動く」をもとに作成）

年 次	資料名	面　積	埋没面積の主な変化
明治18年	諏訪湖みかん割図	14.526 ㎢	自然埋没で約30ha（30町歩）が陸地化。
明治35年	県の実測	14.322 ㎢	
明治36年			天竜川を約30cm掘り下げ、豊田地区付近が約26ha（26.12町歩）干潟される。
昭和 7年			天竜川の掘り下げなどにより花岡下浜、諏訪側に約14ha（42,752坪）の人工埋立て。
昭和10年			諏訪市大和、中浜、中門付近で約9.5haの埋め立て。このほか下諏訪町高浜で昭和26年～30年かけて若干の埋立て。
昭和12年			
昭和13年			
昭和18年			
昭和20年			湊で1.0haの埋立て
昭和39年			
昭和42年	県土木部	13.7 ㎢	浚渫、湖岸堤工事による埋立て約45.7ha（岡谷分131 h 12.4ha：昭和44年度～平成4年度）
昭和44年			
平成 4年	県土木部	13.3 ㎢	

■ 「変化した諏訪湖の湖面」の参考文献

Ａ：長期連載記事諏訪湖　第8部「湖面動く」 昭和56年9月17・19日：市民新聞グループ
内容：諏訪湖の湖面の変化を紹介　　保管場所：諏訪地域の各市町村図書館
Ｂ：渋崎“渋崎百年史” 平成9年1月：渋崎100年史編集委員会
内容：諏訪市渋崎区のあゆみ　保管場所：諏訪市図書館

● 諏訪湖の漁業

諏訪湖での漁業は、湖周辺の縄文遺跡からは、魚を捕らえるための網を使用したと考えられる石錘・土錘が発見されるなど、古くから行なわれていたことがわかっています。記録としては、鎌倉時代末期、「鎌倉幕府下知状」「伸長管文書」に表れ、さらに「諏訪大明神画詞」にも鵜縄を用いる鯉馳(こいはせ)や氷曳(こおりびき)などの漁法について記され、中世までに諏訪湖の漁業は大きな発展をみせたことがわかります。この後、豊臣家治世で日根野氏が入部し、藩内の漁業も含め経済政策の強化を図りました。その後、江戸時代になっても、高島藩では日根野氏の漁業政策を受け継ぎ、漁労は人々の暮らしの支えのひとつとして発達しました。

明治にはいると、いくつかの村の独占であった漁業は広く開放され、このことにより湖の魚は激減したといわれています。この対策として、種魚等の捕獲の制限、川干、氷曳やずり曳などの漁法の禁止、禁漁区の指定などの規制がされました。このため、一時的に湖の魚は増えましたが、明治の後半になると、徐々に減少傾向がみられるようになります。

こうした背景から、自然孵化の漁業から、積極的に養殖・放流する漁業への転換が考えられ、そのための組合として、明治45年に諏訪湖漁業組合が設立されました。その後、大正5年に専用漁業権を得て、近・現代の諏訪湖漁業の発展に大きく貢献しました。

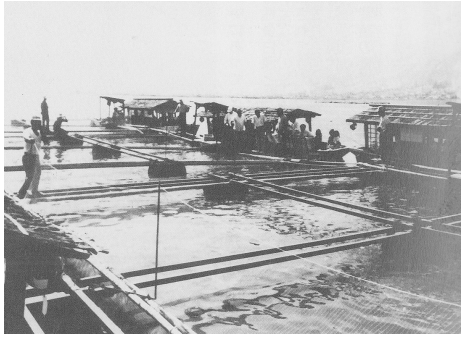
諏訪湖への魚類の移植については、江戸時代に源五郎鮒を琵琶湖から、小エビを河口湖から、シジミを山梨県の荊沢川から、放流したことがわかっています。しかし、本格的に移植が始まるのは大正4年からであり、大正15年(昭和元年)までに、鮎、ワカサギ、鰻のシラスとダツ、ひめ鱒、シジミ、からす貝、どじょう、あみ、鮒、まなぎろも、ひら鮒をつぎつぎと放流しました。その中で成果がひときわ目立ってよいものがワカサギで、漁獲量は急激に増加することになりました。また、鯉、鮒、鰻などの放流が盛んとなり大正期から昭和初期にかけ漁獲高はピークを迎えます。

第2次大戦後の混乱期、諏訪湖の漁業は無統制となり、不安な社会情勢のもと多くの漁獲が個人のものとなりました。このような状況を解消するため、昭和23年に諏訪湖漁業協同組合が設立され、明治期の諏訪湖漁業組合と同じように魚類の保護育成と増殖を目的とし、諏訪湖の漁業権がこの組合によって管理統制され、保障されることになりました。

漁獲量は、昭和38年には451tとピークに達しましたが、昭和30年代の流通革命により、海産物が身近なものとなり、川魚への嗜好は徐々に薄らいでいきました。この傾向は諏訪湖の漁業にも影響をあたえるようになり、漁業の形も変化しました。この時期から諏訪湖の漁業を支えるものは、網生簀による養殖鯉とワカサギの人工孵化事業が主要なものとなっています。

昭和40年代から、諏訪湖の水質の悪化により酸素不足のスス水現象が発生し、養殖鯉が浮き上がるというアクシデントに見舞われましたが、順調に生産を伸ばし、昭和53年には1，345tと最盛期を迎えました。しかし、簀養鯉の餌が湖汚染の原因のうちの1つの要因となっていた事もゆるぎない事実です。

現在の諏訪湖の漁業は消費者の嗜好の変化、漁獲量の落ちこみから、衰退傾向にあると言わざるを得ない状況にあります。それとともに、諏訪湖水質の改善にともない、悪質な釣の愛好家によって放流されたブラックバス、ブルーギルの激増による駆除が大きな問題となっています。(A)



鯉の網生簀

※アルファベットは、参考資料を指します。これらの目録は、章末に列記してあります

諏訪湖の伝統漁法　　（A）

○　沖曳
明海でする氷曳網、冬の氷曳網を二艘の舟で曳く。

○　流し網
葛の茎を長くつなぎ、鳥もちを塗って、風上から水鳥の群れている波の上に流す。

○きよめ・たけたか
刺し網のこと。幅 30～100cm、長さ 12m を一反とし、湖底に張り巡らす。小魚用。たけたかは鯉・鮒などの大型狙いに使用。夕方沈め、朝引き揚げる。

○うなわ（鵜縄）
長い縄に鵜の羽を挟み湖中を曳き回し、魚を追い集めて投げ網で獲る。

○鵜遣い
鵜縄を使用せず、放っておいて、それを鵜匠が平舟で集める。

○餌掬い
長柄の先に網をつけ、餌をまいて掬い獲る。

かつてのシジミ漁

○ごろ曳
春先、氷が岸辺だけに残った時、氷の下に魚が集まる習性を利用し、氷の先にたけたかをはって漁夫が杵や丸太を持って、一列に並び、氷を叩いて魚を網に掛ける。

○桶ひて
蚕蛹と米ぬかを炒った餌を泥に混ぜて団子にしたものを桶型のものに入れ、喉をつけた蓋をして藻中に沈めておく。主として蛯獲りに使う。

○ろうや（出格子）・かぶと
篠で作った籠に餌を入れ沈めておき、蛯、小鮒を獲る。

○蜆とり・えび網
大型のじょれんと箕型のものに掻鎌で掻き込む。

○田蜆網
鉄製の重い枠に漏斗状の網をつけ、湖中を曳き回して獲る。

やつか漁（昭和１３年）

○投網
戸網、唐網のこと。網を湖や川に投げうって魚を獲る。沖、草引、岸、川など立地条件や漁獲する魚の種別で網を使い分ける。

○四ツ手網
二本の丸竹を曲げて四つ手に組み、底網をつけたもので、河川や湖岸の浅瀬に沈めて、群れをなして産卵に来る魚を待ち受けて、時期をみて持ち上げて獲る。

結氷期漁

○やつか（屋塚）
夏、2m くらいの浅い所に、枕大の石を推く積み上げ、冬季になって石のすき間に魚が潜んだ
時、素早く周囲に簀をはり、中の石を除いて魚を掬ったり、簀の一か所に設けたうけに追い込んで獲る。

○氷曳（こおりびき）
長さ 1300 から 1400m、幅 160 から 170mの広い氷上で作業が行われる。左右 16 反（約 176m）の長い網を氷の下に張ってゆき、網の中に入った魚を獲る。48 人の漁夫が、まず、氷斧で 30 から 40cm に堅く凍った氷に穴を開け、網袋を下ろし、そこから長く網を張っていかれるように先々に開けた穴に竹竿で順次垣網を送り越し、広く張り巡らしてから袋網の中の魚を獲る。

● 諏訪湖のスポーツ

■スケート

諏訪地域のスケートの起源は、旧制札幌中学校から旧制諏訪中学校に転校してきた田中稲実・克積兄弟が明治36年2月、諏訪湖上で滑ったことから始まり、明治37年に、同校に赴任した体育教師山本嘉一が授業にスケートを取り入れて普及し始めたといわれています。明治42年には、南信日日新聞社（現　長野日報社）が主催者となり、第1回諏訪湖一周競技会が開催されました。これは、上諏訪中浜沖を起点とし下諏訪・湊・豊田を回ってゴールにかえる約 13,000m のレースでした。優勝した小口卓襄さん（当時　諏訪中学2年生）は、数万の観衆の歓呼を浴び、新聞で賞賛されるなど正に英雄であったそうです。この大会は、大正5年まで開催されました。また、全日本スピードスケート選手権大会が、大正14年、15年（昭和元年）、昭和2年と続いて諏訪湖で開催され、大日本氷上競技連盟主催の選手権大会が昭和3年、日本スケート会主催の競技会が昭和4年に諏訪湖で開催されました。しかし、昭和12年の全日本氷上選手権が諏訪湖を会場とする最後の大会となり、以後の全国大会々場は蓼ノ海となりました。

このように、競技スケート大会が盛んに行われるとともに、この地域では冬のスポーツとして一般の人々にもスケートが定着し、スケートを目的とする観光客も訪れるようなります。明治末期から諏訪湖は一躍スケートのメッカとして全国からの注目を集めることとなりました。現在は、完備された人工のスケートリンクが諏訪湖周辺にできたこと、諏訪湖の結氷が不安定で氷の厚さがスケートに耐えられないことなどから、昭和59年以降は、スケートリンクは作られていません。諏訪湖でのスケート風景は失われましたが、小学校の授業にスケートが取り入れられなど、この地域のスケート熱は今もって衰えていません。（Ａ）、（Ｂ）、（Ｄ）

諏訪湖でのスケート風景

※アルファベットは、参考資料を指します。これらの目録は、章末に列記してあります。

■水　泳

諏訪湖では漁労などで水泳は日常のこととして行われていたと思われます。諏訪湖で水泳が体育運動として始まったのは、明治45年（大正元年）に旧制諏訪中学遊泳氷滑部が鶴遊館沖に飛び込み台を作り、夏休みに水泳講習会を開いた時からです。翌大正2年からは、諏訪湖横断遠泳を鶴遊館沖から天竜釜口までの間で始めました。大正6年には、諏訪湖横断遠泳が水泳講習のしめくくりの全校行事となりました。このころの水泳は、古来の水練に類する遊泳であったそうです。その後、諏訪湖横断遠泳は、大正14年に競泳となり小坂観音沖から鶴遊館に向かうレースで、戦後まで続くことになります。

諏訪湖での水泳風景

水泳は、水質の悪化により昭和33年に禁止され、昭和57年に24年ぶりに諏訪湖水泳大会が開催されましたが、定着はしませんでした。最近の諏訪湖の水質改善により、平成12、13年に、諏訪環境まちづくり懇談会主催で「およごう諏訪湖 2000・2001」として、海の日に諏訪市湖畔公園から初島までの水泳大会が催されました。日常的に水泳が諏訪湖で行われるようになり、水泳客でにぎわう諏訪湖畔の風景が見られるようになる時が、真に諏訪湖の復活の日となるのではないでしょうか。（Ａ）

■ボート競技

第21回下諏訪レガッタ（下諏訪町、下諏訪体育協会、長野県ボート協会主催）は、10月13日に下諏訪漕艇場で、県内外から76クルーが出漕してレースが行われました。この大会は、昭和53年の「やまびこ国体」のボート競技が、下諏訪町で開催されたことをきっかけとして昭和56年から開かれています。

明治34年4月、上諏訪町島崎の前田貞氏が購入したボート2隻を旧制諏訪中学校が借用し、その年の6月24日に第1回端艇（ボート）大会が開かれ、諏訪湖のボート競技の第1歩を踏み出しました。そして、翌明治35年夏に琵琶湖で行われた武徳会の大会に7名の選手を派遣したのが、長野県における対外試合の最初でした。第2次世界大戦前、大正、昭和とボート競技は旧制諏訪中学校の独断場で、遊漕していました。戦後は、諏訪清陵高校、阿南高校、岡谷南高校の3校での競漕の時代となっています。そして、昭和27年には長野県ボート協会が設立されました。

旧制諏訪中学校短艇部（大正 14 年）
伊東克郎氏所有：諏訪市博物館複写版を転写

一般では、諏訪清陵高校ボート部の OB が社会人第1号として諏訪漕陵会を結成し、国体へも出場し活躍しています。このような背景のもとに、現在は多くの人々にボート競技（レガッタ）は愛され親しまれています。（C）、（D）

河西勇氏（長野県ボート協会顧問：元会長）にボートの歴史の話をうかがった時に、「昭和24年から諏訪清陵高校でボートを漕いでいたころは、諏訪湖はきれいで、湊の一番深いところは、4m位透明度があった。そこの水は飲んでも大丈夫だったし、ミミズで石垣のウナギを釣って食べもしたな。」と懐かしく話されていました。

当時の思い出を随筆の中で「昭和二十四年　春まだ浅き四月　朝靄の立ち込める静かな湖面に、パッシパッシとオールの音が響く　朝5時早朝の練習である。また放課後の重いオールを水から抜く、汗一杯の全身をぐんと後ろに倒す。既に諏訪湖は暮れ、山並みは黒く沈み、岸辺の人家の灯が煌く、見上げる大空だけが茜色に明るい。一瞬の静寂すべてが止まる。舟底に当たる漣波だけがヒタヒタと生吹を伝える。力いっぱいの躍動から瞑想の世界へ“無我”唯あるのは悠々たる自然。」と書かれています。

このほか、諏訪湖では昭和53年の“やまびこ国体”の時にヨットハーバーが整備されたこともあり、その後、ヨット、モーターボート、ウインドサーフィンなどのスポーツが盛んに行われています。また、ジョギングロードを備えた諏訪湖畔の道路が整備され、平成元年から長野日報社主催による「諏訪湖マラソン大会」が、平成4年から諏訪湖走友会主催による「さざなみ駅伝」が行われるなど、諏訪湖周辺では、各種のスポーツがにぎやかに行われています。

第 33 回国民体育大会ヨット競技
諏訪市所有：諏訪市博物館複写版を転写

■「諏訪湖の漁業」、「諏訪湖のスポーツ」の参考文献

A：諏訪近現代史　昭和61年7月：諏訪教育会発行
内容：諏訪地域の明治・大正・昭和史　保管場所：諏訪地域の各市町村図書館、諏訪教育博物館
B：諏訪湖「治水の歴史」 平成10年3月：長野県諏訪建設事務所刊
内容：諏訪湖の治水・浄化及び湖岸環境事業の記録とともに諏訪湖の概要、歴史上の説話を紹介
保管場所：長野県諏訪建設事務所建設課、諏訪地域の各市町村図書館、小中学校、
C：漕艇三十年　昭和59年12月：長野県漕艇協会編集員会発行
内容：諏訪地域のボート競技の歴史と協会のあゆみ
保管場所：長野県諏訪建設事務所所長室、諏訪地域の各市町村図書館
D：「清陵80年史」 昭和56年11月：長野県諏訪清陵高等学校同窓会発行
内容：旧制諏訪中学校からの諏訪清陵高校史　保管場所：諏訪地域の各市町村図書館

諏訪湖周辺のあゆみ

○貞享　元年　　上諏訪宿に本陣ができる
○宝暦　3年　　上諏訪が宿場町として旅籠屋が3軒できる
○明治　8年　　諏訪の展覧会で「氷魚漬」出品
○明治15年　　湖南村の鷺湖社がシジミ缶詰製造
○明治37年　　※諏訪湖畔で貸席「湖明館」営業開始
○明治40年　　諏訪湖畔で貸席「鶴遊館」営業開始
○明治42年　　※※湖畔初の旅館、「鷺ノ湯」開業
○明治41年　　COD　1．1ppm、透明度冬3m以上。夏1m以上、センニンモが優占種
○明治45年　　諏訪湖漁業組合結成

○大正　4年　　ワカサギ卵霞ヶ浦から導入（400万粒）
○大正　8年　　カラスガイ霞ヶ浦（琵琶湖1920年）から導入

※大正12年、諏訪湖畔での琴の演奏会（湖明館にて）

※※大正期、湖畔の旅館（鷺ノ湯）の1コマ

明治４０年８月１５日発行の『南信日日新聞』
「中央線が開通して、東京から客がどっと上諏訪温泉を訪れ、客数では軽井沢を抜いて第１位、売り上げに於いては上諏訪がどんなに背伸びしても手の届くものではなかった。これは中流以下の客種が多かった為と思われる。上諏訪は長野第１位の客を迎えたわけであるが、上諏訪を訪れ、どんな感想をもっただろうか。諏訪へ避暑に来る者は旅館が湖岸に櫛比しており、舟遊釣魚は自由にできて、鬱蒼たる樹木の中にある湖水を思ってみれば、沼田の中に湖水があって、旅館からは望遠鏡でなくば湖面は見られぬと言うので、一驚に喫するとは避暑客の皆唱うる不平である。避暑客の客室に対する不平を聞くに、諏訪は寒国のためか、室は総じて空気の流通が悪い。寒地の大工は自然的に温かく設計するものとみえる。２階、３階の夕日の照り込む時は、むしろ暖国の風通しのよき旅館のそれよりも苦しい時がある。その他ヤン虫が多いの、蚊がいるの、旅館の待遇が素敵に悪い、と評をたてられていたようである」

○昭和　3年　　片倉館が完成
○昭和　6年　　ワカサギの採卵・孵化事業が六斗川（改修前の上川）で始まる
○昭和　7年　　**釜口水門工事、湖底浚渫**
○昭和15年　　長野県水産試験場を下諏訪町下の原に設置

片倉館は、当時の片倉財閥2代当主兼太郎社長が、大正11 年～12 年の北中南米～欧州視察旅行の際に、ヨーロッパ各国の農村には充実した厚生施設が整っている事に強い感銘を覚え帰国後、我が国にもぜひそのような地域住民のための施設を作りたいと願い建設され、昭和3年に完成しました。

特に、当時のチェコスロバキア・カルルスバーグに在った厚生施設に強い関心を覚えたようで、自身の日記にも訪問体験を詳しく記録され、片倉館建設にもそのアイデアが多く採り入れられているそうです。

○昭和23年　諏訪湖漁業協同組合が設立（諏訪湖漁業組合を改めて組織化）

○昭和24年　旅館有志が中心となり、小口煙火店の協力を得て第1回「諏訪湖祭湖上花火大会」開催。昭和26年より諏訪市に移管される

○昭和27年　諏訪湖遊覧船「しらさぎ丸」就航

○昭和27年　諏訪湖で幻の真珠養殖

○昭和29年　湖中に人口島の初島ができ、湖上に※ゴンドラが浮かぶ

※諏訪湖のゴンドラ

冬のワカサギ漁

○昭和30年　諏訪湖に水上スキーお目見え
2本のスキーではなく、長さ2m、幅1m、厚さ50cmのソリのようなスキーを使用した

○昭和31年　砥川でワカサギの採卵開始

○昭和33年　**諏訪湖汚染のため遊泳禁止となる**

○昭和37年　コイの網生簀飼育試験開始

○昭和38年　信州大学理学部付属諏訪臨湖実験所開所

○昭和39年　諏訪市中央衛生センター供用開始　排水、湖への放流

○昭和40年　諏訪湖浄化対策研究委員改発足

○昭和40年　アオコの発生が目立つ

○昭和41年　網生け簀養鯉、すす水により50トンへい死

○昭和42年　7月豪雨により大水害により加盟旅館27館中22館被害

○昭和42年　湖岸堤改修開始

○昭和43年　重金属汚染問題の発生（10月）、厚生省の安全宣言（昭和44年2月）

○昭和43年　**「諏訪湖浄化に関する研究」発行**、下水道の建設・浚渫・水草の除去を提言

○昭和44年　　諏訪湖浄化対策連絡会議発足
○昭和44年　　**湖底浚渫第1期工事**（～昭和55年、水深2．5m以浅　151万m^3）
○昭和46年　　環境基準の類型設定（COD、SSなど）
○昭和46年　　諏訪湖流域下水道事業に着手
○昭和46年　　諏訪市立上諏訪中学校の有志生徒が諏訪湖清掃を始める。
　　その後、学校行事として定着。
○昭和47年　　渋のエゴ埋め立て（～昭和51年）
○昭和48年　　諏訪湖水域に係る上乗せ排水基準を設定（BOD（COD）、SSなど）
○昭和53年　　新釜口水門建設に着手
○昭和53年　　9月新作花火大会開催
○昭和54年　　諏訪湖流域下水道の供用開始
○昭和56年　　**湖底浚渫第2期工事**（泥深50cm、530万m^3の計画）
○昭和57年　　台風18号で諏訪湖氾濫
○昭和58年　　諏訪湖畔で県下初、世界第二位の間欠泉噴出
○昭和58年　　長野県水産試験場諏訪支場（昭和56年改称）アユ種苗センターを併設
○昭和58年　　台風10号で諏訪湖氾濫
○昭和59年　　環境基準の類型指定（窒素、リン）
○昭和61年　　諏訪市湖畔公園オープン（セイコーエプソン（株）寄贈）

諏訪市湖畔公園は、（株）諏訪精工舎（現セイコーエプソン（株））によって計画、施行され諏訪市に寄贈されました。この公園は、「諏訪湖と諏訪の人々のふれあう場をこの湖畔公園に創り上げたい。**湖の持つ「回帰性」を受け「ノスタルジック」な思い出に浸れる空間**を用意する。そして、そこでは人を中心とした自然と文化の適度な配合によるうるおいのある豊かな活動が生まれる事を期待している。」とのポリシーのもと、造られています。

また、空間構成は、振り子を意識し、初島を中心として野外ステージ、モニュメント、間欠泉を配置しています

有賀裕氏のとっておきの話として、「あまり知られていないけど、この公園の四阿の屋根は、片倉館の勾配に合わせてあるそうだ。」とのことです。

○昭和61年　　湖沼水質保全特別措置法に基づく**指定湖沼の指定**
○昭和61年　　諏訪テクノレイクサイド推進協議会主催で「LAKE 諏訪コンペ‘86」行われる。
○昭和63年　　**第1期諏訪湖に係る湖沼水質保全計画**（S62～H3）を策定
○昭和63年　　諏訪湖底の菱形構造物が話題を呼ぶ
○平成元年　　第1回「日独環境まちづくりセミナー」開催
○平成元年　　第1回「諏訪湖マラソン」開催
○平成元年　　諏訪湖クリーンラリー（平成5年からクリーンフェスティバルに改称）開催

○平成 2年　　間欠泉センターオープン。
○平成 3年　　第2回「日独環境まちづくりセミナー」開催
○平成 5年　　**第2期諏訪湖に係る湖沼水質保全計画**（H4～H8）を策定
○平成 5年　　第3回「日独環境まちづくりセミナー」開催
○平成 5年　　河川再生事業として**高浜、渋崎の人工なぎさ**完成
○平成 5年　　ヨシ原浄化実験場（クリーンレイク諏訪）を完成させ、葦等浄化効果を検証
○平成 5年　　「諏訪湖エコロジーフェスティバル」を開催
○平成 6年　　釜口水門噴水オープン
○平成 6年　　諏訪環境まちづくり懇談会主催で、湖周バス運行開始
○平成 6年　　「水辺整備のマスタープラン」を策定
○平成 6年　　諏訪湖水域に係る上乗せ排水基準を策定（窒素、リン）
○平成 6年　　湖沼特定事業場に係る窒素、リンの汚濁負荷量規制基準を設定
○平成 7年　　「水辺整備のマスタープラン」を基本に**河川再生事業を本格着手**
○平成 8年　　第1回「マリンスポーツカーニバルイン諏訪湖」開催
○平成 8年　　国、県、市町村で諏訪湖及び天竜川上流部水環境懇談会を設立
○平成10年　　**第3期諏訪湖に係る湖沼水質保全計画**（H9～H13）を策定
○平成13年　　第4回「日独環境まちづくりセミナー」・第1回「湖沼浄化シンポジウム in 諏訪」開催
○平成14年　　第11回「国際河川湖沼環境シンポジウム」・第2回「湖沼浄化シンポジウム in 諏訪」開催
○平成14年　　諏訪湖アダプトプログラムが始まる。
○平成14年　　ブラックバス駆除　33万尾

■　「諏訪湖周辺のあゆみ」の参考文献

A：諏訪湖「治水の歴史」 平成10年3月：長野県諏訪建設事務所刊
内容：諏訪湖の治水・浄化及び湖岸環境事業の記録とともに諏訪湖の概要、歴史上の説話を紹介
保管場所：長野県諏訪建設事務所管理計画課・建設課、諏訪地域の各市町村図書館、小中学校、

B：諏訪湖温泉温泉旅館組合30周年記念誌　平成11年4月：諏訪湖温泉旅館協同組合刊
内容：諏訪湖温泉旅館組合の沿革と諏訪湖の歴史　保管場所：有賀裕氏等蔵、

C：諏訪湖漁業組合所蔵の年譜：諏訪湖漁業協同組合所蔵

D：諏訪湖畔公園　昭和60年5月：諏訪市・（株）諏訪精工舎（現セイコーエプソン）作成
内容：諏訪湖畔公園の設計コンセプト等について　保管場所：有賀裕氏等蔵、

E：LAKE諏訪コンペ'86作品集　昭和61年：諏訪テクノサイド推進協議会

※本章には、第4回日独環境まちづくりセミナー、第1回湖沼浄化シンポジウム in 諏訪を開催した際に、複写させていただきました写真を、多数使わせていただきました。

■ **市民新聞の「諏訪湖」の特集記事**

市民新聞で昭和54年～昭和59年にかけて諏訪湖全般について特集されていますので紹介します。

諏訪湖　　合本昭和５４年（１９７９年）～５９年（１９８４年）に連載

年　次	月　日	内　容
昭和54年	2月11日	第1部水門あたり①
	2月20日	第1部水門あたり②
	2月24日	第1部水門あたり③
	5月31日	第2部曽根あたり
	7月27日	第3部さかなたち総集編① コイ
	7月29日	第3部さかなたち総集編② ウナギ
	8月4・7・9日	第3部さかなたち総集編③,④,⑤ 〃
	8月11日	第3部さかなたち総集編⑥ ザリガニ
	8月14日	第3部さかなたち総集編⑦ グッピー、メダカ
	8月30日	第3部さかなたち総集編⑧ エビ
	9月4日	第3部さかなたち総集編⑨ エビ
	9月8日	第3部さかなたち総集編⑩ ワカサギ
	10月17・20・30日	第3部さかなたち総集編⑪,⑫,⑬ 〃
	12月23日	第3部さかなたち総集編⑭ 〃
	12月23日	第3部さかなたち総集編⑮ ジュズカケハゼ
昭和55年	5月2日	第3部さかなたち総集編⑯ ヨシノボリ、カマツカ
昭和56年	1月15日	第5部天然ガス総集編
	3月18日	第6部御神渡り総集編
	4月25日	第7部水平虹総集編
	9月17日	第8部湖面動く総集編①
	9月19日	第8部湖面動く総集編②
	9月23日	第9部みずくさ総集編①
	9月26日	第9部みずくさ総集編②
	12月5日	第10部大洪水総集編①
昭和57年	1月3日	第10部大洪水総集編②
	2月6日	第11部とりたち総集編①
	3月19日	第11部とりたち総集編②
	3月27日	第11部とりたち総集編③
	12月4日	第12部あふれる湯総集編①
昭和58年	7月2日	第12部あふれる湯総集編②
	9月3日	第12部あふれる湯総集編③
	12月17・25日	第12部あふれる湯総集編④
昭和59年	7月1日	第12部あふれる湯総集編⑤
昭和59年	1月1・24日	第16部昔の氷のころ①,②
	2月2・4日	第16部昔の氷のころ③, ④ 刺し網
	2月5・6・7日	第16部昔の氷のころ⑤,⑥,⑦ やつか
	2月8・10・11・14・16・17日	第16部昔の氷のころ⑧,⑨,⑩,⑪,⑫,⑬ 氷曳き
	2月19・21・22・29日	第16部昔の氷のころ⑭,⑮,⑯,⑰ 氷上射流し
	3月1・3・6日	第16部昔の氷のころ⑱,⑲,⑳ 〃
	3月7日	第16部昔の氷のころ21 釜穴
	3月8日	第16部昔の氷のころ22 流氷
	3月9日	第16部昔の氷のころ23 水の圧力